

# 描く水俣病の現実

水俣

## 東プロ、さよなら映写会

水俣

水俣病の現地撮影を続けていた

東京・東プロ（代表・高木隆太郎

氏、宇土郡三角町出身）が、近く

水俣市を去るにあたって、十八日

夜「さよなら映写会」をした。同

プロはすでに約四万坪（約二十時

間分）とテープ吹き込み約百時間

を終え、そのうち二時間分の未編

集フィルムを上映した。そのなか

では、底抜けに明るくおおらかな

漁民と風物を底流に、水俣病の全

体像を浮き彫りにしようとしてい

る努力が見られた。

同プロは七月初め、水俣病巡礼

団とともに熊本入り。以来約五カ

月間、水俣市を中心に撮影を続

け、十九日水俣病の未認定患者の

撮影で水俣市での日程を終えた。

二十日は熊本地裁での水俣病裁判

第七回口頭弁論をとり、二十五日

午前患者家族とともに大阪でのチ

ツソ株主総会の「一株運動」へ向

かう。

上映したのはおもに二、三の患

者家庭と、海を写した部分。妻を

水俣病でなくしたあるタコ取り名

人の夫。妻がケイレンしながら死

んでいったことを語らせたあと、

タコ取りの場面を追う。家の近く

の波静かな不知火海で、潮が引い

たあと、ハコメガネでタコを捜す

姿は、風物詩的シーン。タコの姿

体もユーモラス。「これだけでも

一本にまとめられるほどだった」

と言う。

患者家庭では、知能の遅れたま

ま、からだだけがふくらんだよう

な患者の目や手足の動きを見詰め

る。音感が異常に発達しつつある

オルガン好きの青年もいる。また

明るい子だくさんの家庭での胎児

性患者が、家族の中でどう位置づ

けられているかなど心理的考察も

ある。これらはすべて実名入りで

ナレートすることになっている。

こうした患者の明るさを全面に

描きながら、水俣病の本質を追究

しようとしている姿がみられ「さ

よなら映写会」でも、入場者（約

二百人）は、一様にこうした感想

をもらっていた。

なお、同プロは来年二月までに編集を終わり、一般公開したい意向。